NEWSLETTER
保育・子育て総合研究機構だより

2012.6.1発行　NO.24

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

巻頭言　赤ちゃんの社交能力や助け合う能力

４月は、新年度が始まり、０歳児クラスには新入園児が多く入園してきます。当初は、あちらこちらで赤ちゃんの泣き声がしています。それは、新しい環境への不安と、保護者と離れることへの不安が大きいのでしょう。赤ちゃんは、生まれて間もなくでも、隣で寝ている赤ちゃんが泣いていると、それにつられて泣き出し、泣き声の大合唱になることがあります。また、親がイライラしたり、不安になったりすると、その気持ちが赤ちゃんに伝わることがあります。

今年２月22日、「まだ話すことのできない赤ちゃんも、相手をからかったり、友情を結んだりする方法を知っているとの研究を、オーストラリアのチャールズ・スタート大学の研究チームが発表した」というAFP 通信によるニュースが流れてきました。

そのニュースによると、研究チームは、保育園の赤ちゃんたちの頭部に小型カメラを装着し、他の赤ちゃんとどのように交流するかを２年間研究しました。ただし、赤ちゃんたちにはカメラの装着を強要せず、１回の装着時間も10～15分ほどだったといいます。こうして収録された映像には、生後６～18か月の赤ちゃんが洗練された非言語手段を使って友だちをつくり、互いを笑わせ合う様子が映っていました。

同大学の幼児教育学教授、ジェニファー・サムション氏は「この研究から、スプーンでさえも特大サイズに見える『赤ちゃん目線』の世界を知り得ることができた」、「赤ちゃんたちの社交能力や助け合う能力、さらに他の赤ちゃんをグループに誘ったりと、赤ちゃんたちのとても洗練されている様子を見て、私たちはとても驚いた」と、AFP 通信に語っています。

さらにサムション氏は、赤ちゃんたちは視線と手の動作、それとユーモアを使って交流をしているとし、また赤ちゃんたちが「間近で観察しないと気づかないような、ちょっとした社交遊びをしている」といいます。例えば、相手におもちゃを渡すふりをして最後の瞬間にさっと遠ざけたり、隣り合う子どもいすに座った赤ちゃんどうしが、ふざけて互いの飲料ボトルを取り換え合ったりするなどの遊びが見られたそうです。

また、１歳の女の子が、不安気な様子の赤ちゃんに反対側が透けて見える布をそっとかぶせてあげて、赤ちゃんの視界を確保しつつも安心感が得られるように配慮する姿がカメラにとらえられていました。

「私たちが驚かされたのは、これほど幼い赤ちゃんどうしで行う遊びについてだった。これを確認できたのは非常に有益だ」と、サムション氏は語っています。

このような赤ちゃんの行動は、毎日保育園で赤ちゃんと接している私たちは気づいています。しかし、その行為は、赤ちゃんの集団がいる場でなければ観察することができません。ですから今までは、赤ちゃんのこのような力の研究はされてこなかったようです。どうも、赤ちゃんにとっては母親との関係だけが大切で、もしくは特定の養育者との関係が大切で、その二者の関係の中で向き合うこと、愛情を確かめることが絶対的なことであることが強調されてきたようです。このオーストラリアでの研究対象は、生後６～18か月の赤ちゃんであり、保育園でいえば０歳児クラスの子どもたちです。この頃は、特定の大人との関係が大切で、徐々に他の大人と触れ合わせ、そこには、特定の人との愛着形成が欠くべからずといわれてきたことに少し修正が必要であることがわかってきているのです。

また、京都大学大学院教育学研究科准教授の明和政子と、同大学霊長類研究所特定准教授の平田聡らの研究グループは、「ヒトは他者の顔色をモニタリングしながら他者の行為を理解する」という特徴を初めて明らかにしました。この研究成果は、今年２月21日発行の「Nature Communications」に掲載されました。さらに、同誌における「今週の Featured Paper」にも選ばれ、世界に配信されました。

この研究の課題は、「ヒトは、他者の行為のどこに注

目し、どのような情報を選び、何を学んでいるか」ということです。それを、ヒトとチンパンジーとの比較実験から、「他者の表情に注目して行動パターンを学習するのは人間特有の能力である可能性があること」から、「人間は赤ちゃんの頃から顔色をうかがう」ということを突き止めたのです。明和准教授は、「ヒトは乳児の時から、顔をはじめとする行為者の心の状態を映し出す情報と、操作されているものとをよく見比べ、それらの情報を統合して行為の意味を理解する。ヒトの乳児や成人が他者の顔を見て心を推し量っていると は断言できないが、ヒトとチンパンジーでは世界をモニタリングするパターンが違うことは明らか」と解説しています。

新入園の赤ちゃんを観察していると、ほかの赤ちゃんに非常に興味を持ちます。じっとやることを見ています。そして、触ろうとします。ほかの子が泣いていると覗き込んだりしています。人間は、もともと他人との関係の中で生きており、生まれてからすぐにそれに興味を持つようにできているようです。

（**藤森平司**●東京・新宿せいが保育園園長）

レポート

諸外国の教育事情と対話しよう

―急がされる子どもたち

…米国の子どもを取り巻く話題から幼児期に大切なことを考える

「さあ６歳！よちよち歩き時代（トドラー toddler）を卒業したら、自制、思考、集中する能力を身につけてより賢く！」（2011年12月27日付）

これは、全米３位の部数を発行する新聞ニューヨーク・タイムズ「科学欄」の一面を飾った見出しです。急進的との批判もある同紙ですが、世界の現況や米国社会の展望を鋭く描く論評を掲載することでも知られています。記事の内容は、数か月前のものであることや直接乳幼児に関係するものではありませんが、乳幼児期に対して課題を投げかけているので、あえて報告することにします。

★今、米国では「児童中期（７～10歳）」が成功へのカギを握る時代として着目されている

米国の公立小学校（５歳児のキンダーガーテンは公立の場合、殆ど付設されている）の廊下を歩くと、各教室入り口の壁やドアに「教育目標（標語：スローガン）」が貼り出されていることに気づかされます（写真参照）。その多くが、学校教育は「成功」のため、という言葉を掲げています。

記事では、その成功のカギを握るのが、今まであまり注目されなかった６、７～10歳の児童中期であるとして着目しているのです。第２次性徴期に入る瀬戸際

こころの風景 4

みんなと同じにやりたい

四肢にまひがあって、身体運動にハンディキャップを持つＹ男ですが、クラスのみんながしていることは、自分も同じにやりたいと、意欲はいつも前向きで、その気合いが言葉になって周りを励ますほどです。

年長組最後の冬になって、保育園ではこま回しをみんなが競い合う毎日でした。Ｙもみんなと同じようにこまを回したいのですが、紐を巻くことができなくて、紐ごまが回せません。でも、そのこまを、紐を使わず手の指で器用にまわすことでは、みんなが一目置いていました。

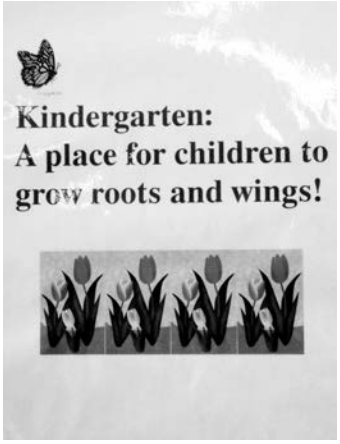
そんなＹが、コマと紐を持って来て、みんなと同じように回してみたいと訴えてきたのです。紐をこまに自分で巻けて、それを介添えなしの自力で回せて、その両方ができて、できたということなのですが、まずは回せた喜びをみんなと同じに体験できないかと思いました。そこで、紐を巻いたこまを渡し握らせて、そこに私が手を添えて投げてみるのですが、手を離すタイミングがなかなか定まらず、外投げになったり、内投げになったりしてしまいます。

投げ方によって紐の巻き方が逆になるので、どうしたものかと思案しながら、何度が挑戦していくうちに、内投げのほうが体も安定することがわりました。そこ

の時期として、またピアジェの発達理論による「具体的操作期」として一般的にとらえられてきていましたが、最近の研究により、この時期こそ、脳の活動が『ON』とスイッチが入り、物事に対する意味づけ（モノゴトの因果関係への認識）が可能となり、「認知的創造性」と将来を展望する「野心（大志）」を抱く期間として脳神経が最も活発な働きをするというのです。すなわち、この時期をどのようにすごすのかが、自律的、規範的な青年期になるかどうかに関係すると、研究者の談話等をもとに述べています。

★文化によって、子ども時代の生活は異なる
…理想的な児童中期はあるの!?

それでは、具体的にどのような児童中期をすごすのが理想的なのでしょうか。果たして、普遍的に理想的な６（７）～10歳の生活は存在するのでしょうか。ここで、記事は文化人類学の研究を引用して、文化によりすごし方はさまざまであることを語っています。16か国を比較したハーヴァード大学のDr.クレマーとDr.グレイヴスによると、１日のうち、北ケニヤの牧草地の女児は9.6時間、ネパールの農村部の女児は7.5時間を労働にあてており、北アフリカのバーバー族の女児は、１人で家族の食事の用意を任されるとあり、労働に従事することから責任感や地域の一員としての自覚を育てると述べています。その一方、ヴェネズエラ西中央部の狩猟を主な生活とするピューメ族の女児は、成人女性となるまで殆ど何も課されることはなく、この時期同年齢の友だちや異年齢の子どもとおしゃべりしたり笑ったり、伝統民芸のビーズづくりにいそしみ、社会性を養う時としている、とも述べています。　また、男児については、パプアニューギニアのコーマ族では、自分の農地が与えられ畑を耕し農作物を収穫する新しい責任が課され、中央アフリカの先住民ピグミーグループの１つのムブティ族の男児は、この時期に本物の狩猟を習うとあり、大なり小なり責任を負う時期であると報告しています。



キンダーガーテン（５歳児クラス）は、子どもの根っこと翼を育む場！

こうした調査とは対照的に、米国では６、７歳の児童中期は小学校に入学して、まさに学習の「黄金期」として脳の活性化が促進され、身体的に活発な生活となり、家族から友だち中心の関係へと社会の広がる時期であると報告しています。記事は、現在の米国の児童中期のとらえられ方が最も理想的なすごし方ではないことを暗に示唆しているのです。そして最後に、それでは児童中期どうする？と読者に投げかけています。

で、内投げを覚えようと何度も挑戦していくうちに、たまたまうまい具合にタイミングがあって、回ったのです。回った嬉しさを満面の笑顔で伝えるＹです。

しかし、私が手を添えているので、Ｙが回せたと周りも認めない（子どもは妥協しません）だけでなく、本人もまだ満足していませんでした。でも、Ｙも一度は回った嬉しい体験から、私を見るとコマを持って「園長～、一緒にやろう」と毎日のように誘います。

３月のある朝に、それまでは紐を巻いたこまを持たせてもうまく握れなかった指が、自然とこまを握る指と手の形になって、私の手からＹの手にすっとこまが納まるようになりました。Ｙの手がこまを覚えてくれたようでした。そして、まだ不安定ながらも投げるタイミングも体が少しわかってきたのか、自分で投げたこまが床の上で何度か回るようになったのです。

「よっしゃー！」こぼれる笑顔とガッツポーズを見せてくれたＹと、「できたね」と喜ぶ仲間の存在。保育園での生活に、また一つ自信が増えたＹですが、Ｙのあこがれで居てくれながら、諦めずに練習しているＹの姿を見守り、一緒に喜んでくれる仲間の存在って大きいなと思うのです。

（**鈴木眞廣**●千葉・和光保育園園長）

「ピアノ？チェス？外国語？スキー等のレッスン？…それとも…外に出て、思いっきり友だちと遊ぶ？」「（よちよち歩きの時から）遊びを通して公正さ（社会におけるフェアネス）を学ぶなら…いつでも友だちはあなたの傍らにいるでしょう…」と結んでいます。

★どうするよちよち歩き時代？…私たちへの示唆

一読すると、この記事は私たちが毎日生活をともにする乳幼児や保育には関係がないようにも思えますが、生涯発達における乳幼児期の「生活のあり方」と「遊びの重要性」についての再考を促していることとしても読み取れます。乳幼児期をどのようにとらえるのか、「子どもの最善の利益とは？」と問い、その普遍性と独自性について園内外の人々と語り合うことから保育の場における乳幼児の生活を考えていきたいものです。

当研究機構では、今、「保育の基盤」を子どもの擁護者、代弁者として語るチームと、子どもの姿を丁寧に読みとる力を育む「わくわーくシートプロジェクト」チームによるアクションに取り組んでいます。対話の輪が広がっていくことを楽しみにしています。

（森 眞理●立教女学院短期大学准教授）

お待たせしました 改訂版『ワークブック１』ができあがります！

保育の実践を高めるための試み　『ワークブック１ 保育園における「子どもの育ちと学びの分かち合い」への招き』の改訂版がようやくできあがります。

2008年７月に１万部を印刷して発刊したものですが、在庫が切れて問い合わせにも応えられずに何年か過ごしました。このワークブックを発刊するきっかけになったのは、ニュージーランド（以下、NZ）が保育評価の手法として取り入れている「ラーニングストーリー（学びの物語記録）」との出会いでした。「保育の質」を高める手立てとして、日本では市場原理による競争と第三者評価や後から加わった自己評価を活用することとしていますが、競争や他者評価ではなく、保育者や子ども・親も含めた当事者自身が参加して保育を振り返り、学び合い／育ち合っている国がNZでした。そこで、その実際を体験的に学べたらと、開発者の１人、ドーリーン・ロンダーさんを東京に招いて開いたセミナーでの学びを、もっと多くの人に紹介したい／体験してほしいとつくったのがワークブックです。

今、世界の保育で注目されている新しい潮流は発達観のとらえ直しです。それは、これまで何歳になると○○ができるようになるといった、周囲から切り離された個としての発達を見ていく「個体発達」に指標を置いた発達観から、人は出会う周囲の人や環境との関係の中で応答的に向き合い、お互い影響し合いながら育つものなのだという「関係発達」としてとらえていくということです。NZでは、この関係発達をベースにおき、子どもを「有能な学び手」として子どもへの信頼を基礎においています。そこで保育者は、子どもがどんなことに興味や意欲を示し、どう学ぼうとしているのかと学び手側に関心を向けて、記録した「学びの物語」を私だけでなく同僚との分かち合い／語り合いを通して、子ども理解を広げ／深め／共有し合い、そこから学びを支えていく手立てを見つけていく（NZではこのプロセスを評価ととらえている）ことを国を上げて日々実践しているのです。

2007年のセミナー以来５年が経過し、ワークブックを活用した研修会も各地で開催されて、発刊当時は理解しきれなかったことも実践の中から見えてきました。そこで、今回改訂版を発行するにあたって補筆しました。「もっともっと子どもがみえる　わかるために」と副題にしているとおり、保育を見つめ直すきっかけになれるものと確信しています。三重大会から販売を始めます。ワークブックをご希望の方、また、このワークブックを使った研修会をご希望の方は、全私保連事務局（髙山・谷口）までご相談ください。

編集後記

◎「子どもがわかる」ことが「保育がかわる」ことに

時代の急激な変化に呼応するかのように、乳幼児に関する研究方法とその知見は日々進化し（藤森代表原稿）、６、７歳についても子ども観を明瞭にする流れが世界的に進んでいるようです（森氏原稿）。このような“子ども理解”が広く現場の保育に役立つムーブメントを起こすこと、それが今の日本の保育界のテーマであると思われます。当機構では、まもなく『ワークブック１ 改訂版』（鈴木委員長原稿）をリリースします。それぞれの園がそれぞれに保育を深める一助にしていただければ、さいわいです。

（片山喜章●神戸市・なかはら保育園園長）

❖問合せ
公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880／ FAX 03-3865-3879
URL http://www.zenshihoren.or.jp
E-mail ans@zenshihoren.or.jp